義太夫協会会報
第 119 号
2026年 1 月 1 日
一般社団法人 義太夫協会 発行
〒104-0045
東京都中央区築地4-3-12
秀和第 2 築地レジデンス706号
Tel. 03（6264）3047
Fax. 03（6264）3048
http://www.gidayu.or.jp

こぞ、ことし

義太夫協会会長　児玉　信

「昭和百年・戦後八十年」という括りで語られることの多かった令和七年でした。関連付けた企画が色々行われた中に「放送百年」があります。NHKテレビがジャンルごとにラジオ草創期からの記録を纏めて特番放映していました。演芸界や歌謡界などの移り変わりが面白くて見入りました。

NHKの前身にあたる社団法人東京放送局でラジオ放送が始まったのは大正十四年（一九二五年）三月のことです。未だ仮放送でした。日本放送協会編『放送五十年史 資料編』（昭和五十二年発行）を見ると、第一日目の番組が海軍軍楽隊による吹奏楽で始まり、以下、歌曲・歌劇など洋楽系に交じって箏曲・笙・尺八・哥沢・常磐津など邦楽系の名が挙がっています。次いで六月には大阪放送局が仮放送を始めますが、ここでは清元・浄瑠璃などの名が見えます。七月には名古屋放送局が本放送を始めました。このときは謡曲・囃子・三曲・筑前琵琶・新内などが演奏されています。

ちなみに東京放送局の本放送は大正十四年七月、大阪放送局の本放送は大正十五年十二月に始まりました。ラジオ劇『桐一葉』、講談『俵星玄蕃と杉野十兵次』など興味を惹かれる番組ですが、名古屋の本放送では豊竹駒之助（一八九八～一九九一）が『太功記十段目』を語ったとあるのが目を引きました。名古屋を中心に活動した女流義太夫のようです。楽劇学会誌『楽劇学』第二十一号に、ご遺族から早稲田大学演劇博物館に寄贈された資料が紹介されています（田草川みずき「女流義太夫の資料保存をめぐって―豊竹駒之助関係資料を一例に―」）。

ところで、女流義太夫研究家水野悠子さんが、ほとんど資料がない昭和前期において新聞のラジオ欄がわずかに女流義太夫の消息を伝えてくれると述べ、「ラジオには女義は乗り遅れなかった」と書いています（『知られざる芸能史 娘義太夫―スキャンダルと文化のあいだ―』）。先ほどの『放送五十年史』には大正十四年三月から十五年八月までの十八ヵ月間に放送された種目別放送表が付されており、それを見ると義太夫は百十九回を数えます。月平均六回強で、邦楽十八種目中の一位でした。水野さんは、「読売新聞によると、大正十五年には東京で平均四回ぐらい女義がラジオに出ている」とも書いているのですが、『放送五十年史』に先立って刊行された『日本放送史』の口絵には竹本綾之助ほか時代を彩った女流の写真が載っており、当時の女流義太夫の位置を偲ぶよすがになります。

私は「義太夫協会会報」のバックナンバーを折に触れて読むのですが、こんど創刊号で吉川英史会長が「近年の義太夫界の凋落ぶりには、悲しみよりも、一種の義憤を感じていたし、女流義太夫界の実力が、余りに知られていないことに驚いていた」「広く一般民衆から認められるのは、今後の協会の努力にまたねばならない」とあるのを目にして、忸怩たる思いに駆られています。

義太夫協会の本丸事業である「女流義太夫演奏会」は、令和七年度から「義太夫節演奏会」と名称変更しました。ここには、義太夫協会設立の命題である「義太夫節の伝承と発展という悲願成就」への意思が滲んでいると思います。胴震いして一声高く嘶（いなな）きたいではないか、そんなことを考える新年です。

一九四六年、浜松市生まれ。藝能学会副会長。（公財）日本伝統文化振興財団常任理事。石川県音楽文化振興事業団邦楽プロデューサー、文化庁芸術祭「演劇部門」審査委員など歴任。著書に『ぶらり東海道 五十三次芸能ばなし』『能舞台 歴史を巡る』など。

〈目次〉

「こぞ、ことし」……1
目次／通常総会開催……2
祖先祭・懇親会開催／義太夫教室第七七期・一日体験教室
田中悠美子 佐治敬三賞受賞……3
西川古柳 UNIMA文化遺産賞受賞
新入正会員紹介 鶴澤三響／太夫・三味線の研修
四月公演「名優の当たり役❹」五月公演「鶴澤寛也を偲んで」
六月公演「初代竹本綾之助生誕百五十周年」……4
七月公演「夏の妖しを楽しむ」
八、九月公演「近松半二生誕三〇〇周年Ⅰ・Ⅱ」
十月公演「生写朝顔話 朝顔の旅を追う」
十一月公演「義太夫と平家琵琶」……5
「第五四回邦楽演奏会」／「邦楽演奏会in大阪」
学校公演「語ってみよう義太夫節！」
糸あやつり一糸座 学校巡回公演
「花のように香れ女流義太夫」10周年記念公演……6
ながさきピース文化祭「全国人形芝居フェスティバル」
「邦楽女子鑑Ⅳ」フランス公演／NHK Eテレ「芸能きわみ堂」
赤坂芸術祭「女義太夫×乙女文楽」
舞踊公演「さくらの寿」／映画「国宝」のこと……7
名優と義太夫節【第九回】
「五代目片岡我當・二代目片岡秀太郎」……8
〈義太夫とわたし〉「義太夫は人生を豊かに」……9
協会・正会員の主な動き
協会・正会員の今後の動き……10

通常総会開催

六月二六日、築地社会教育会館において、通常総会が開催されました。当日は左記の議案が付議され、いずれも承認されました。

第一号議案　二〇二四年度事業報告
第二号議案　二〇二四年度決算報告
第三号議案　二〇二五年度事業計画
第四号議案　二〇二五年度収支予算

祖先祭
～近松半二生誕三〇〇周年に寄せて～

昨年十一月三日に、両国回向院にて祖先祭が開催されました。この日は木枯らし一号が吹き、本堂での法要の後、冷たい強風の中でのお墓参りとなりました。大河ドラマで脚光を浴びた山東京伝のお墓も回向院にあると住職から伺い、写真に収めた方も。懇親会では児玉信会長が、「近松半二生誕三〇〇周年に寄せて」と題して皆に用意して下さった近松半二のプロフィール、浄瑠璃作品年譜等の資料を基にお話し下さいました。その後は、竹本葵太夫理事、そして賛助会員の方々が順にお話しされ、あっという間に時間が経ってしまいました。最後に竹本土佐恵理事のお話で、昔（昭和時代）は十二月の公演が終わって二四、五日頃に忘年会を兼ねて祖先祭をとり行っていましたが、ご高齢のお師匠様から「時季的に寒い！」というお声があり、竹本義太夫の命日十月十八日に変更したこともあったとのこと。

開催時期については、皆様のご意見を伺いつつ流動的に検討してまいりたいと思います。

（総務部）

義太夫教室第七七期・一日体験教室

今年度も義太夫教室が開講され、講義中心の前期に続き、一日体験教室を経て、現在は実践コースで生徒の皆様が語り・三味線ともに熱心に稽古に励んでいます。

八月の一日体験教室では、竹本京之助が『仮名手本忠臣蔵 裏門の段』の語りを、鶴澤三寿々が三重・ソナエ・メリヤスなどの三味線の基本を指導しました。終了後も質問が途切れず、受講生の熱意が感じられる時間となりました。

実践コースでは、『菅原伝授手習鑑 寺入りの段』を竹本越孝、鶴澤三響（脇弾き）が、『生写朝顔話 薬売りの段』を竹本京之助、鶴澤弥々（脇弾き）が担当し、三味線は引き続き、鶴澤三寿々が指導しています。

実践コースの様子　豊川稲荷文化会館にて

なお、今年の義太夫教室卒業演奏会・OB会は、三月十五日（日）に浅草公会堂第2集会室にて開催予定です。今年もOBの出演があり、熱気あふれる会になることでしょう。皆様の温かい応援、ご来場を心よりお待ち申し上げます。

（鶴澤弥々）

田中悠美子（鶴澤悠美）佐治敬三賞受賞

写真提供：ぶらあぼ

田中悠美子主催「田中悠美子リサイタル二〇二四～義太夫三味線の音響世界」が第二四回佐治敬三賞（二〇二四年度）を受賞し、昨年六月二五日にサントリーブルーローズホールで受賞式が行われました。現代邦楽・現代音楽から即興音楽へと活動領域を広げてきた田中の、四十年を超える歩みの集大成となる本公演が高く評価されました。

西川古柳　UNIMA文化遺産賞受賞

八王子車人形・西川古柳座の五代目家元、西川古柳が、郷土芸能「八王子車人形」の普及と発展に尽くした功績が評価され、国際人形劇連盟（UNIMA）の文化遺産賞を日本の人形劇関係者で初受賞しました。半世紀にわたり世界約五十カ国で公演を重ねてきた精力的な活動が認められたもので、古柳氏は「世界にアピールするきっかけになれば」と抱負を述べています。

新入正会員紹介

鶴澤三響（つるざわさんきょう）

義太夫教室第七三期を経て、二〇二一年、鶴澤三寿々に入門。二〇二五年、「女流義太夫演奏会二月公演」『壼坂観音霊験記　山の段』で初舞台。

この度は歴史ある義太夫協会の正会員に加えていただき、心より御礼申し上げます。未熟者ではございますが、御師匠様方、諸先輩方の技芸に学び、懸命に精進して参ります。義太夫協会および関係各位の皆様、今後とも何とぞ、よろしくお願い申し上げます。

太夫・三味線の研修

昨年度より正会員の太夫、三味線の研修を行なっております。太夫は十一代豊竹若太夫師匠、三味線は六代鶴澤燕三師匠に講師をお願いいたしました。太夫の課題曲は『仮名手本忠臣蔵　裏門の段』で、若太夫師匠にとても丁寧にご指導いただき、その成果を昨年二月の定期公演で発表いたしました。三味線は琴と胡弓の研修で、一回目は基本の奏法、稽古の仕方など、二回目は『生写朝顔話　宿屋の段』の琴、こちらも十月の定期公演で発表となりました。太夫の研修はすでに二曲目に入り、三味線も胡弓の研修に入ります。今後の研修の成果も大いに期待するところです。

（研修部　鶴澤津賀榮）

四月公演「名優の当たり役❹」五月公演「鶴澤寛也を偲んで」

昨年四月二三日の公演（ティアラこうとう）は、「名優の当たり役」の四回目。十五代目市村羽左衛門の得意とした役に因み、『実盛物語』（越若・賀寿）と『十種香』（土佐子・津賀花）をお聴き頂きました。お話は今回も鈴木英一さん。二枚目として今も多くの人の記憶に残る「橘屋」の様々なエピソードをご披露くださいました。個人的なことですが、舞台上で特に後半、情景が次々に浮かび、鈴木さんの「語り」のお力を実感しました。また、お客様から「祖母がファンだった」「父からよく話を聞いた」等、思いのこもった反響を頂戴し、その特別な存在感を再認識しました。

昨年五月二十日（深川江戸資料館小劇場）は「鶴澤寛也を偲んで」。三回忌に寄せ、演目は寛也の得意とした『花渡し』（越孝・賀寿）と『猪名川内』（綾之助・土佐恵・越里・綾一・駒治・駒清・津賀花）。そして寛也、津賀寿、駒治の勉強会に因んだ『ひこばえ三味線組曲　動物編』（津賀寿・三寿々・津賀榮）。お話は親交の深かった文筆家・矢内裕子さん。故人もきっと楽しんでくれているだろうと思える、温かさに満ちた思い出の数々でした。終演後も寛也を懐かしむお客様がたがロビーに溢れ、なごやかな会となりました。

（公演部　鶴澤賀寿）

六月公演
「初代竹本綾之助生誕百五十周年」

「私のところは来なくていいから初代さんを頼むわね」と言われ、只ひたすら御命日のお墓参りを重ねてまいりました。三代目は信心深い方でしたから、存命中も度々お供した覚えがございます。墓守りの方がサッとお墓をきれいにして下さり、それからお参りを致します。私一人でお参りするようになって長かったですが、そうこうしているうちに同行者が出来ました。三代目のお墓も私のところから地下鉄一本で行かれるところに娘さんが建てて下さり、おかげさまで何かにつけて報告にうかがっています。

そして昨年は初代綾之助生誕百五十周年として記念公演をして下さり、思いがけなく改めて歴代の師匠をしのぶことが出来、光栄なことだなあとお仲間、関係者に感謝、感謝です。

初代お孫様から、「綾之助が百年以上続くとは夢にも思わなかった、嬉しい」という年賀状をいただき、大切に保管しています。それから半年後におばあさまの元へと旅立たれました。

（四代目竹本綾之助）

初代綾之助

初代綾之助　使用見台

七月公演「夏の妖しを楽しむ」
八、九月公演「近松半二生誕三〇〇周年」

昨年七月公演は「夏の妖しを楽しむ」と題して、怪談『東海道四谷怪談 伊右衛門住家の段』（土佐恵・駒清）と、『夏祭浪花鑑 長町裏の段』（京之助・越若・弥々）をお送りしました。「長町裏の段」では綾一、朔弥による鉦・太鼓と、「ちょうさようさ」の掛け声で祭りの雰囲気をお楽しみいただきました。また、義太夫教室七四期修了生でもある三遊亭ぽん太さんをお迎えした落語『死神』では、客席も大いに沸いていました。

続く八、九月公演では、「近松半二生誕三〇〇周年Ⅰ・Ⅱ」と題して、江戸中期の浄瑠璃作家・近松半二の作品を取り上げました。半二は浄瑠璃の衰退期において、竹本座の座付作者としてヒット作を次々と発表、『伊賀越道中双六』の執筆中に死去しました。『本朝廿四孝』『新版歌祭文』など、現在も名作としてたびたび上演されています。

数多い代表作の中から、八月は若手勉強会として、『妹背山婦女庭訓』より、「杉酒屋の段」（孝矢・賀寿／孝之資・駒治）、「道行恋苧環」（綾一・越里・佳之助・越孝・津賀榮・弥々・三響・津賀寿）、「金殿の段」（京之助・三寿々）を、九月は『傾城阿波の鳴門 順礼歌の段』（越孝・津賀花）と『奥州安達原 環の宮明御殿の段』（前：土佐子・三寿々、奥：土佐恵ほか掛け合い・津賀寿）を上演しました。

（公演部　竹本越里）

十月公演
「生写朝顔話　朝顔の旅を追う」

この公演で司会をするについて物語の舞台を地図にまとめてみました。いかにこの物語がスケールの大きな展開になっているかをつかむためです。今のような交通手段が無い時代によくぞここまでのスケールで物語を紡いだものです。

もうひとつ私が挑戦させていただきましたのは床本の朗読です。まず冒頭の部分。ここはナレーションのつもりで読んでみました。もともとが七五調で書かれている部分の多い詞章ですからついつい節を付けて読みたくなってしまうところをこらえて、あくまでナレーションとして読んでみました。聞いた方がなるほどそういう意味の文章だったのか分かったとおっしゃっていただきました。もう一カ所の朗読は深雪の書き置きを選びました。切々と思いをつづるなかに掛詞もあり日本語の美しさがあふれていました。

朗読をしてみて分かりましたのは詞章に太夫の語りと三味線の演奏がついてこそ初めて物語の心情、情緒が伝わり作品として完成するのだということです。これからもまた新たな企画に挑戦したいと思っています。

（元ＮＨＫアナウンサー　水谷彰宏）

十一月公演「義太夫と平家琵琶」

鼎談の様子　深川江戸資料館小劇場にて

本公演は、琵琶法師が『平家物語』を語った「平家（平曲、平家琵琶とも）」という芸能と、義太夫節の関係を耳で確かめようという企画でした。

初期の浄瑠璃の担い手は琵琶法師（盲人音楽家）でした。また浄瑠璃に三味線をあわせたのも琵琶法師でした。義太夫の相三味線も江戸時代に三味線法師となった琵琶法師でした。ですから義太夫節には平家琵琶の影響があるのではないかと、第一部の最初に薦田がお話をしました。そのあと、竹本越里さんと鶴澤駒治さんが『一谷嫩軍記 組討の段』を熱演、日吉章吾さんが平家『敦盛最期』を優雅に語り、両者の聴き比べをしました。

第二部では、鶴澤津賀寿さんと日吉さんと薦田の鼎談で、平家琵琶が多用する開放弦や重音や同音反復が、義太夫三味線の手にも取り入れられているのではないかということを、オクリの手を例に考えてみました。また、「松波琵琶の段」では、琵琶らしさを表現するために用いる特殊ゴマを津賀寿さんが実際に示して紹介してくださいました。最後に、女流義太夫ではおそらく初となるであろう「松波琵琶の段」に竹本越孝さんと津賀寿さんが挑戦してくださり、迫力ある演奏をお客様ともども楽しみました。

（日本音楽研究家　薦田治子）

二〇二五都民芸術フェスティバル 第五四回邦楽演奏会

昨年三月八日、「第五四回邦楽演奏会」がタワーホール船堀にて開催されました。第一部「家族で学び、楽しむ邦楽教室」で『菅原伝授手習鑑 喧嘩の段』（越里・津賀榮）を、〝水〟をテーマとした第二部・第三部で『由良湊千軒長者 山別れの段』（綾之助・津賀花）、『一谷嫩軍記 組討の段』（土佐子・越孝・綾一・三寿々）を上演。

本年三月七日（土）は第五五回目を三越劇場で開催予定です。多彩な邦楽ジャンルによる魅力あふれるプログラムをどうぞお楽しみに。

邦楽演奏会 in 大阪

昨年九月二十日に、大阪の吹田メイシアターにて「邦楽演奏会」が開催されました。司会の葛西聖司さんの楽しい進行に乗って、午前の部「邦楽教室」では八種類の邦楽を順に紹介、豊竹呂秀、鶴澤駒清が出演し『仮名手本忠臣蔵 裏門の段』の一部を演奏しました。

午後の部では五人の人間国宝が一堂に会し、各ジャンルの芸を堪能できる「邦楽演奏会」として、竹本土佐恵、鶴澤津賀寿が『伽羅先代萩 政岡忠義の段』を演奏しました。別フロアでは様々な和楽器を体験できるコーナーもあり、一日中楽しめる盛り沢山な会となりました。

（鶴澤駒清）

学校公演「語ってみよう義太夫節！」

令和七年度、文化庁による学校巡回公演が左記の三校で実施され、竹本越京、竹本京之助、竹本越里、鶴澤三寿々、鶴澤賀寿、鶴澤弥々が参加しました。

六月四日　福井県越前市・武生第一中学校
六月五日　福井県美浜町・美浜西小学校
六月六日　京都府京田辺市・普賢寺小学校

演奏は『寿式三番叟』と『菅原伝授手習鑑 車曳の段』の二曲。他に義太夫節の解説や、各校の校歌を義太夫節に作調して紹介するコーナーもあります。なかでも大いに盛り上がったのは、全員による「大笑い」と口上体験、代表の生徒さんによる「車曳の段」（一部）の発表の時間です。元気な声が体育館いっぱいに響き渡り、出演者一同、感無量でした。

（鶴澤弥々）

糸あやつり一糸座　学校巡回公演

糸あやつり一糸座の、二〇二五年度「舞台芸術支援事業（学校巡回公演）」に、竹本越孝、竹本綾一、鶴澤三寿々、鶴澤津賀榮が参加しました。

今年度は、福井県内の小学校三校へ六月の第一週目に行きました。上演した四演目の内、『東海道中膝栗毛 赤坂並木より卵塔場の段』『橋弁慶』『櫓のお七』を演奏しました。

前回福井県を訪れた時にはいなかった恐竜たちが、今回ＪＲ福井駅を出ると出迎えてくれました。さすが恐竜王国、福井県！

（竹本綾一）

花のように香れ女流義太夫
10周年記念公演

写真提供：川原盛和様

蕨市立文化ホールくるる主催の女流義太夫若手育成公演「花のように香れ女流義太夫」が十周年を迎え、昨年六月十五日に記念公演が開催されました。

竹本駒之助師の監修のもと、補佐・賛助出演の鶴澤津賀寿師、同じく賛助出演の鶴澤駒治、鶴澤津賀榮、特別出演として竹本土佐恵、竹本土佐子、竹本越京、竹本佳之助、鶴澤三寿々の皆様をお迎えし、豪華なプログラムとなりました。また蕨市長がお祝いにかけつけて下さいました。

演目は『寿式三番叟』、レクチャー「ちょっと義太夫」を挟み、『桂川連理柵　六角堂の段』。若手にとって大きな挑戦となる曲目に取り組みました。『寿式三番叟』では、肩衣のお披露目もありました。

演奏後には、長年にわたり会を支えてくださっている児玉信先生へ花束の贈呈もあり、会場全体が華やいだ雰囲気に包まれ、温かな会となりました。（竹本孝矢）

ながさきピース文化祭2025
「全国人形芝居フェスティバル」

昨年十月十八日・十九日、第四十回国民文化祭の一つとして波佐見総合文化会館ウェイブホール大ホールで開催されました。

義太夫協会は特別出演し、竹本越孝・竹本孝之資・鶴澤駒治・鶴澤津賀花が参加しました。長崎県指定無形民俗文化財である皿山人形浄瑠璃保存会の『二人三番叟』と『傾城恋飛脚　新口村の段』、また八王子車人形西川古柳座の『東海道中膝栗毛　赤坂並木から卵塔場の段』を務めました。前月には稽古を行い、地元の方々と交流を深めました。（竹本孝之資）

皿山人形浄瑠璃保存会の皆様と

フランス公演 Interactions japonaises

昨年九月四日から六日「邦楽女子鑑Ⅳフランス公演」が行われました。

竹本越孝と鶴澤三寿々に加え、大江戸助六太鼓の座古瑞穂、コーディネートのカンタン・コリーヌ、パリ在住ダンサーの永末アコによる「光」をテーマとした舞台創作プロジェクトで、連日盛況のうちに幕を閉じました。

四日（オリウル）、五日（マルセイユ）、六日（レ・ペンヌ＝ミラボー）。（鶴澤三寿々）

芸能きわみ堂「大河ドラマ連動！べらぼうな時代の浮世絵師たち」

昨年十月三日、NHK Eテレ「芸能きわみ堂」にて、葛飾北斎の「富嶽三十六景・神奈川沖浪裏」にインスピレーションを受け作られた同名の三味線曲（芳村伊十七作曲）が大和櫻笙、鶴澤津賀寿ほかの演奏で放映されました。蔦屋重三郎の時代の人気絵師の浮世絵を基に作られた芸能がテーマの回でした。

写真提供：NHK

赤坂芸術祭2025 crossing 公演
「女義太夫×乙女文楽」

昨年十月二一日に赤坂サカス広場の紫テントで開催された赤坂芸術祭2025 crossing公演「女義太夫×乙女文楽」に、竹本京之助、鶴澤津賀花、鶴澤弥々が

出演しました。

水谷彰宏氏のご案内で、ひとみ座乙女文楽『二人三番叟』（京之助・津賀花・弥々）と素浄瑠璃『絵本太功記 尼ヶ崎の段』（京之助・津賀花）を。「尼ヶ崎」は藤舎朱音社中による陰囃子入りの特別演出で上演しました。紫テントならではの一体感に満ちた印象深い舞台となりました。

（鶴澤津賀花）

舞踊公演「さくらの寿」

昨年十一月二日、荒れた日本海を渡り佐渡へ。三日の本番は朝から豪雨と雷でしたが、島内また東京からもお客様が足を運んでくださり、世阿弥ゆかりの金井能楽堂は神聖な空気と喜びに包まれました。

移住先の佐渡で活躍されているこの会の主宰、西崎櫻鼓さんの舞踊で、『金山三番叟』（鶴澤津賀寿節付）、『花競四季寿 海女』の二曲を上演。長唄とお囃子も加わり華やかな舞台に。

翌日、皆でトキを一目でもと、車から目を凝らしながら帰ったのも楽しい思い出です。

（竹本京之助）

前列左から京之助、越孝、津賀寿、弥々、杵屋佐喜さん、後列は福原百之助社中の皆様

映画「国宝」のこと

映画「国宝」（二〇二五李相日監督）が、空前のヒットを続けている。

原作は、二〇一八年に吉田修一作家生活二十周年記念作として書かれた小説で、歌舞伎指導および出演の中村鴈治郎丈のもとで、三年間に渡り、黒衣として舞台裏を取材の後に書かれたものだそうだ。

映画が一般的になぜここまでヒットしたのかよくわからないが、映画のヒットから、原作も発行部数が二百万部を突破、ロケ地巡りも流行っているとか。

我々、古典芸能に従事する者としては、「国宝」というインパクトが強く、私は公開の六月六日までにあわてて原作を読んで、早々に見に行ってみた。

かなり大胆に原作のエピソードをカット、後半はプロットを変えて、映画は一つのテーマを浮き彫りにしようとしている。代々続く伝統芸能かぶきを背景に、二人の役者の生き方を追い、かぶきというものになにが潜んでいるのか、役者の見る景色はなんなのか、を追求、監督も役者もスタッフも、皆で時間をかけて魂を込めて表現したのだと思う。

監督の言葉によると、「国宝」は、「誰も見たことのない景色を見た人」と捉えられており、それがこの映画のテーマでもあるだろう。その象徴として、雪が扱われていて、鷺娘もその延長で選ばれているのかもしれない。

私は合計四回見たのだが、三時間という長さも感じないし、飽きることがなく、見れば見るほど発見もあり、感じることも違った。そして、見れば見るほど、田中泯だった。昔風の古怪な女方。その目の演技は奥深い。

制作が東宝であることも意外だったし、かぶき役者を使わずにあれだけの実演をさせていることも意外だったが、結果的には、二人の役者の素の部分を挿入したり、その人の人生と重なっている演目を同時に映していったりすることで、映画の主人公を演じることそのものと、かぶきを演じることが重なりあい、不自然さもなければ、かぶきの部分とその他の部分が大きく一つのうねりを作り上げることができたのではなかろうか。

よく、「覇王別姫」と似ている、と言われるが、あちらは吹き替えでセリフが入るし、劇中劇に対する考え方が違うのではないかな？二人の友情やライバル関係の深い結びつきも印象的だった。芸にライバルが必要、ということは身をもって感じるところだ。

奇しくも、映画「国宝」の興行収入、動員数の記録が二十二年ぶりに塗り替えられて一位になった、と発表のあった日、日本テレビ「踊る！さんま御殿!!」（昨年十二月九日放送）の収録があり、「日本の伝統文化を受け継ぐ有名人」の中になぜか出演させていただいた。有名人でも芸能人でもないのに出演させていただけたのは、ひとえに、映画「国宝」のヒットのおかげで、このチャンスを無駄にせぬよう、一丸となりたいものだ。

（鶴澤津賀寿）

連載　名優と義太夫節

【第九回】五代目片岡我當・二代目片岡秀太郎

上方歌舞伎の名門松嶋屋。この度の当代仁左衛門丈の文化勲章受章は、父である十三代目仁左衛門丈、兄の我當丈・秀太郎丈、松嶋屋ご一家にとって何よりの慶事と思う。伝え聞く上方歌舞伎不振の時代、十三代目は私財を投げうつ覚悟で「仁左衛門歌舞伎」を自主公演し、子息は歌舞伎俳優で生活できなくなったら「バー・ニビキ」（「丸に二引き」は松嶋屋定紋）を開業しようと相談するほどの苦境。それを耐え忍ばれ、こんにちとなった。

十三代目は「役者に義太夫節の稽古は不可欠」という考えで、子息は八代目竹本綱大夫師や女流の竹本綱吉師に教えを受けた。

我當丈の義太夫節は拝聴の機会がなかったが、秀太郎丈は何度か聴かせていただいた。「堀川」のお俊のクドキが気に入らず、竹本の太夫にみずからひとくさり語って聴かせて注文。筆者は傍で稽古を見学していたのだが、あまりの面白さについ顔がほころんだ。きちんとしている上に聴く者を楽しませるような語り口なのである。俳優がこれほど語るのかと敬服した。稽古が済んで「なんや葵ちゃん、人の浄瑠璃聴いて笑うなんて失礼やないか」と言われ、実はこうこうで…と申し上げたらご機嫌で「今夜飲みに行こ！」。後年、祇園のバーでも主人の三味線で「木遣音頭」をご機嫌で披露した。コブシを利かせた語りであった。

何度かしみじみとお話を伺ったことがある。「妹山」の雛鳥を演じていて、竹本雛太夫師の〽千年も万年も…」が「あぁ…ええ声やなあ」と自然に涙がにじみ出て役に没入できたとのこと。九代目竹本源大夫師の話では、歌舞伎・文楽合同公演で「新口村」を上演したおり「織さん（当時五代目織大夫）のようにおなかで芝居をしてくれると自然と芝居ができる」と話されたとのこと。俳優にとって竹本は「声」も「性根」も大切という教訓である。

なんでもたっぷりやったらよいのかという逆で、十三代目同様「延びんように」と詰めて語るのを好まれた。また歌舞伎で多用するセリフの合間のウケの三味線も極力省略。ご自分にとって不要な詞章は削除。太夫の訛りに厳しく、容赦なく指摘した。もちろん私もご注意を頂戴した。竹本の若手に注意したあと「あんたとこの国宝も訛るからな」と皆の前でイケズを言われたこともある。しかし言ってくださるのは親切なのである。

各個認定を受けられたのは令和元年で、私もご一緒だった。認定証授与式のあと参内して賜茶が通例だが、陛下の御即位行事の関係で延期となった。とても残念がられているうちにコロナ禍となり、ご自身の体力も弱られてきた。最後の舞台となった南座「熊谷陣屋」の藤の方は気力で舞台稽古を勤め、楽屋へ引き揚げるときに出語りの床に手をつき「なぁ葵ちゃん、いつになったら陛下にお目にかかれるのやろうなぁ…」とさびしくつぶやかれたのが言葉をかわした最後となった。

兄の我當丈の逝去は昨年五月だったが、七月に公表され驚いた。筆者はあまりご一緒する機会がなかったが「勘平腹切」で〽寸分違わぬ糸入縞」を「あなたはちゃんと読みますねぇ、結構ですよぉ」と言われたことがある。やはり訛りに厳しく「封印切」で〽存分贔屓な」の「贔屓」を直していただいた。伝統をきちんと守るため目を光らせておいでだったが、何度言っても直らないと大変なかんしゃくを起こされるので有名だった。

毎年六月、十三代目から受け継いだ関西地区の歌舞伎鑑賞教室で主演なさっていた。同時に竹本の若手を育成する意識をお持ちで「あの太夫は私が育てました」と自負していらした。義太夫狂言を売物にする俳優にとって竹本は重要な協演者である。ある師匠が「あたしたち竹本は役者に調教されて使われていくんです」と仰せだった。表現として適切ではないが言い得て妙である。

十三代目は子沢山で、三兄弟の他に姉妹もおいでで、皆様協力して片岡家を盛り立てるようすが見受けられた。ところがこの数年で当代を残し、次々にお亡くなりになられた。つらい時代を共にしたご一家皆様、当代の栄誉を泉下からとてもよろこんでおいでに違いないと筆者は思う。

（歌舞伎義太夫・太夫　竹本葵太夫）

シリーズ
義太夫とわたし

義太夫は人生を豊かに

これまで新聞記者、会社の広報室長、選挙の政策づくりの手伝いなど、さまざまな仕事に携わってきましたが、思い切ってすべてをやめ、これからは好きなことをして生きていこうと決めました。

もともと文楽、歌舞伎、落語が好きで、文楽には二十年ほど通っていました。溝口健二監督の『近松物語』（原作のひとつが『大経師昔暦』）、北野武監督の『HANA-BI』、『Dolls』といった映画を観たり、川端康成が三十歳頃に書いた『浅草紅團』の中に娘義太夫が描かれているのを読んだりする中で、義太夫という芸能がずっと心に引っかかっていたのだと思います。そんな折、何かのきっかけで義太夫教室のことを知り、第七七期を受講しました。

教室に通い始めてからは、義太夫の語りそのものが音楽なのだと、より強く感じるようになりました。語りと三味線が一体となって物語を作り上げていくこと、その文学性や奥深さに、ますます惹かれています。

教室の土曜日、ゆったりとした時間の中で皆さんと稽古を楽しみ、講師の先生方から普段はなかなか聞けない師匠方の芸談を伺うのも楽しみの一つです。年齢のせいか背筋が曲がり、声もぼそぼそしてきましたが、以前は妻に「何を言っているかわからない」と言われていたのが、会話がよく通じるようになったのはお稽古のおかげかもしれません。

公演の案内や感想をFBに書くと、「俺も行きたい」と言ってくれる友人もいます。自分の義太夫観を発信するのも楽しいです。人生のラストに向かう中で、義太夫を深く学び、直に観て聴いて感じられることは、心を豊かにしてくれる幸せな時間だと思っています。

（東日本国際大学客員教授・コラムニスト　田部康喜）

■協会・正会員の主な動き■

二〇二五年一月～十二月

【公演】

義太夫協会／義太夫節保存会主催

・「女流義太夫演奏会」「義太夫節演奏会」
一月十五日　ティアラこうとう
二月十六日　紀尾井小ホール
三月十九日　ティアラこうとう
四月二三日　ティアラこうとう
五月二十日　深川江戸資料館小劇場
六月十三日　紀尾井小ホール
七月十七日　ティアラこうとう
八月十七日　渋谷区文化総合センター大和田伝承ホール
九月十五日　深川江戸資料館小劇場
十月十六日　ティアラこうとう
十一月十七日深川江戸資料館小劇場
十二月二一日深川江戸資料館小劇場

協力

・「じょぎ」お江戸上野広小路亭
三月一・二日、五月一・二日
七月一・二日、九月一・二日
十一月一・二日

・「ぎだゆう座」お江戸上野広小路亭
二月一・二日、四月一・二日、六月一・二日、八月一・二日、十月一・二日、十二月一・二日

・「花のように香れ　女流義太夫」
第二三回　二月十一日
第二四回　六月十五日
蕨市立文化ホールくるる

・「第五四回邦楽演奏会」
三月八日　タワーホール船堀

・「邦楽教室・邦楽演奏会」
九月二十日吹田市文化会館メイシアター

後援

・「第二回京之助の会」
一月二五日・二六日
両国回向院念仏堂ホール

・「古民家で娘義太夫vol.3問室」
二月二二日・二三日

・「女流義太夫演奏会瑠璃の会第9回」
三月一日　国立文楽劇場小ホール

・「法真寺で義太夫を聴く会　その四」
四月十二日　法真寺本堂

・越若の「一度やってみたかった！」vol.1
義太夫節と薩摩琵琶　敦盛最期を語る
八月二三日　荒木町舞台津の守

・「第十六回竹本土佐恵の会」
九月二七日　月島社会教育会館

・越若の「道を愉しむ会」その壱
義太夫節と中国古典音楽を愉しむ
十月十一日　法真寺本堂

・「大阪女義復興プロジェクト2025」
はじめての義太夫体験教室
十一月八日・九日（各日二回）
高津宮　末広の間

・「女流義太夫 父の真実」
十一月十五日　浅草公会堂第2集会室

依頼

・「乙女文楽第十四回公演」
二月一日・二日
川崎市国際交流センターホール

・ながさきピース文化祭2025
「全国人形芝居フェスティバル」
十月十八日・十九日
波佐美町総合文化会館ウェイブホール

【普及】

義太夫節保存会・義太夫協会主催教室

四月十九日　豊川稲荷文化会館
八月十日　芸能花伝舎

◆第七六期義太夫教室
〔実践コース後期〕一月～三月（各土曜）
豊川稲荷文化会館

◆第七六期義太夫教室卒業発表会
三月二十日　月島社会教育会館

◆第七七期義太夫教室
〔入門コース〕五月～七月（各土曜）
豊川稲荷文化会館
〔実践コース前期〕九月～十二月（各土曜）
豊川稲荷文化会館

【放送・放映】

◆NHK FMラジオ「きき初め邦楽特選」
・一月一日
「新版歌祭文」野崎村の段
浄瑠璃：竹本駒之助
三味線：鶴澤津賀寿　ツレ：鶴澤津賀佳

◆NHK FMラジオ「邦楽百番」
・七月二三日
「曲輪燵」吉田屋の段
浄瑠璃：竹本綾之助
三味線：鶴澤津賀寿　ツレ：鶴澤弥々

◆NHK FMラジオ「邦楽のひととき」
・一月二十日
「烏帽子折茅源氏」伏見の里の段
浄瑠璃：竹本綾之助　三味線：鶴澤津賀花
・四月二一日
「苅萱桑門筑紫轢」高野山の段
浄瑠璃：竹本土佐恵　三味線：鶴澤駒清
・六月九日
「奥州安達原」袖萩祭文の段
浄瑠璃：竹本越若　三味線：鶴澤賀寿
・七月二九日
「伽羅先代萩」御殿の段
浄瑠璃：竹本土佐子　三味線：鶴澤津賀花
・十二月十六日
「仮名手本忠臣蔵」身売りの段
浄瑠璃：竹本越京　三味線：鶴澤津賀榮

◆NHK Eテレ「芸能きわみ堂」
・十月三日
「富嶽三十六景・神奈川沖浪裏」
太棹三味線：鶴澤津賀寿

◆日本テレビ「踊る！さんま御殿!!」
・十二月九日
出演：竹本葵太夫、鶴澤津賀寿

■協会・正会員の今後の動き■

二〇二六年一月～十二月

【公演】

義太夫協会／義太夫節保存会主催

・「義太夫節演奏会」
一月二五日（日）なかの芸能小劇場
二月二三日（月祝）深川江戸資料館小劇場
三月二二日（日）なかの芸能小劇場
四月十八日（土）なかの芸能小劇場
五月十七日（日）なかの芸能小劇場
六月十四日（日）なかの芸能小劇場
七月二四日（金）なかの芸能小劇場
八月二十日（木）深川江戸資料館小劇場
九月十三日（日）なかの芸能小劇場
十月四日（日）渋谷区文化総合センター
大和田伝承ホール
十一月二十日（金）渋谷区文化総合センター
大和田伝承ホール
十二月二一日（月）深川江戸資料館小劇場

協力

・「じょぎ」お江戸上野広小路亭
三月一・二日、五月一・二日
七月一・二日、九月一・二日
十一月一・二日

・「ぎだゆう座」お江戸上野広小路亭
二月一・二日、四月一・二日、
六月一・二日、八月一・二日、
十月一・二日、十二月一・二日

・「花のように香れ 女流義太夫」第二十五回
七月七日（火）蕨市立文化ホールくるる

・「第五十五回邦楽演奏会」
三月七日（土）三越劇場

後援

・「女流義太夫演奏会 瑠璃の会第10回」
三月八日（日）国立文楽劇場小ホール

・「竹本越里演奏会（仮）」
九月十一日（金）浅草・木馬亭

・「第十七回竹本土佐恵の会」
十一月ごろ　会場調整中
・「竹本越若 一段語る（仮）」
秋ごろ　会場調整中

依頼

・「乙女文楽第十四回公演」
一月二四日（土）・二五日（日）
横浜人形の家　あかいくつ劇場

【普及】

義太夫節保存会・義太夫協会主催教室

◆第七七期義太夫教室
〔実践コース後期〕一月～三月（各土曜および日曜一回）
豊川稲荷文化会館・国立劇場第一研修室

◆第七七期義太夫教室卒業発表会
三月十五日（日）浅草公会堂第2集会室

◆第七八期義太夫教室
〔入門コース〕五月～七月（各土曜）
〔実践コース前期〕九月～十二月（各土曜）
ともに豊川稲荷文化会館

【放送・放映】

◆ＮＨＫ ＦＭラジオ
・一月九日（金）・十六日（金）
「ライブジャポニズム！福之音」
出演：竹本京之助、鶴澤津賀花

■寄付・寄贈■

左記のご寄付・ご寄贈を頂戴いたしました。誠に有難うございました。（五十音順掲載）

寄付　田部康喜様／鶴澤燕三様
鶴澤津賀寿様／日本素義会様（春・冬）
林操様

寄贈　鈴木多美様プロジェクタースクリーン

■特別会員新規入会■

新井保子様

■お知らせ■

〈寄付募集〉
一般社団法人義太夫協会は、義太夫節の向上普及・発展を目的として活動しています。義太夫節を多くのお客様にお楽しみいただき、次世代へ繋げていく事業をご支援いただきたく、ご寄付を募っております。

お申し込みフォーム

〈募集〉
女流義太夫のプロ志望者を随時、募集しています。詳細は義太夫協会までお問い合わせください。

〈お願い〉
「大日本素義会」関係の資料を調査しています。手放されたり廃棄されるご予定がございましたら義太夫協会までご相談ください。
（鶴澤三寿々）

【会報編集】鶴澤津賀花・竹本越京
竹本京之助・鶴澤津賀佳
義太夫協会事務局
【印　刷】京成社

昭和、平成、令和と
素義の先輩諸氏、そして
女流義太夫のみなさまの
熱い思いに支えられてきました。

一九六三年発足

GIDAYUU JOHRURI

日本素義会

まさに「継続は力なり」。
これからも日本素義会を
よろしくお願いいたします。

第百二十四回日本素義会、令和八年五月五日開催予定